

求道俳句誌 余白の風

二〇一六年五月号
第二二〇号
奇数月二〇日発行

発行と一
主宰・白田
余平

俳句や短歌をつくりながら、「南無アツバ」の心を養います。

会員作品とエッセイ (*選評)

旭川・広谷和文

旭川頌栄保育園卒園式、卒園児十二名なれば

二十四の瞳輝き卒園す

平田栄一さんの新著出版を祝い

日 『「南無アツバ」への道』を賜る野の花

*玉稿賜りありがとうございます。北海道の広い大地を縦横にご活躍の様子。ご自愛ください。
①若い芽が育っていくうれしさ。次世代の心にアツバの心が育まれていきます。

高知・赤松久子

奇跡なる星に生まれて南無アツバ

虫の音のバックコーラス鳥鳴く

山と川窓より眺む秋日和

秋日向ベランダに出て南無アツバ

*「季節バラバラですが」とお手紙にありましたが、作句も即興だけでなく、回想による方法も十分に意義あることと思います。句作によりアツバの心を感じ取ることがわたしたちの求道俳句の目的ですから。

練馬・魚住るみ子

戸を閉すと仰ぐ宵空南無アツバ新月の鎌
西に浮きゐる

五年経ち現在も遺体を探すとふ瓦礫掘る
手を如何にかはせむ
胸に抱く子の背を撫づる若き母 泣くな
みどり児南無アツバ

階段を見つめつつ降るこの日頃歩歩を労
り六十代終る

新刊の『「南無アツバ」への道』、ことに「あ
とがきにかえて」等、感銘しつつ拝読して居
ります。

卒寿になり、まだ杖無しで歩いています
外出がやや億劫になり、観劇や旅行も出来な
くなりました。作品をお読み下さり、活字に載
せて頂いて、大きく励まされて居ります。三人
の幼い曾孫の存在と短詩の創作に活力を頂
いて居ります。

年新た卒寿に集ふ孫曾孫

*人の一生にはその時その時の課題と、チャン
スト、力が与えられることを思わせられる御作
の数々。「行き詰まりの状態にあつても、キリ
ストのために満足しています。なぜならわたし
は弱い時にこそ強いからです。」(二コリ一二
一〇)

東京・山口佐喜子

教皇のメッセージ聴く淑気かな

賜りし平安の日々松の内

受難節蠟涙に見るキリストを

*①現在のフランシスコ教皇は、現代がかかえ
る様々な難題に、果敢に提言や行動を起こさ
れています。わたしたちも祈りのうちに応援し
たいと思います。南無アツバ

名古屋・片岡惇子

鶯の連呼に目覚む主の呼びかけ
谷渡りマリア観音翳深まり
花冷えの光ゆれたる主の復活
主のパンと血戴く花の教会かな
祈りの手に引き寄せられて桜散る
散る花の思ひは何処傷癒えぬ

*①「鶯の連呼に」「主の呼びかけ」を聞く耳
と心、③「花冷えの光」のゆれに「主の復活」
を思う目と心。イエスの、アツバのまなざしは
わたしたちが賜った五感と心で受け止める。

豊田・佐藤淡丘

行く春に衿を正せり大地震
風に蝶蝶に風あり影迅し
遠き人近き人あり山笑ふ
花の塵土やはらかに溶けゆくを
白れんや声一つなく空を占む

土の道

コンクリートの道がとぎれた、土の道だ。で
も、この大地が「熊本・地震」につながって
いると思うと心が痛む。今朝も歩こう、この空を
仰ぎ、この水を見、この土を確かめ、被災者へ
の思いを深めて祈ろう。

アツバ、アツバ、南無アツバ、と。

『「南無アツバ」への道』まだ全部読み終え
ておりませんが、第六章の「他者の哀しみに心
を痛める」の章は、ぐっと身を寄せて読んで
いる最中です。

*拙既刊『求道俳句集』に、

秋の地に立つあの方へ続く地に

という句があります(初出〇三年「紫」)。井上神父は生前、「わたしたちの人生は、底が抜けた樽が大海に浮いているようなもの」と表現していました。

昭島・新堀邦司

再入院・再手術

手術着をきて小寒の朝迎ふ

点滴のかがやき落ちぬ寒の朝

高熱のため夢うつつ

こんな夜は姿を見せよ雪女

寒簫々退院の日の遠のきぬ

山眠るひたすら眠り予後の日々

*アツバの「力は弱さの中でこそ十分に発揮される」(ニコリ一二・九)のです。どうぞゆっくりと養生なさってください。祈ります、南無アツバ。

大阪・島一本

祈るとき天使の羽根に緑さす

祈るまも紫陽花変化わが心

軽口も楽しミサ後の草取りは

*②祈りの中でさえわたしたちの心は右往左往することがあります。心配や不安で集中できない祈り——でも、そういう時にこそ、主は近い、とも言えるのです。右聖句の続き、「だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。」(ニコリ一二・九)。

一宮・西川珪子

フクシマの原発春の遠かりしみちのくの瓦礫にも咲け黄水仙
散らすまじ触れず見守るさくらかな
開け放つ窓春風を入れるため

私はもう遠出はできません。先生とお逢いできた過ぎし日、本当に良かったとなつかしく思い出しています。物忘れが激しく…すべて南無アツバのお計らい。

*はい。貴女が東京に出て来てくださったって、私の講座で、「アツバというのは、お父様ということですか？」と、幼子のように率直に質問されたことを、よく憶えています。どうぞ、アツバへの求道俳句を続けてください。祈りは必ず聞き入れられます。

平田栄一新刊『「南無アツバ」への道』

◎青野太潮先生からコメントを頂きました——「何箇所かに私へのご言及があつて大変嬉しく思いました。大変よく書かれていて感心いたしました。おまとめになるのはそれなりに大変なことですが、ほんとうにご苦労さまでした。井上洋治先生もお喜びのことでしょうと確信しております。」



南無アツバへの道
井上洋治先生の著書に出会う
平田栄一

(定価800円+税)
聖母文庫 ☎095・824・2080。サイン本ご希望の方は平田までご連絡ください。送料込み千円)

平田講座要約(第41回)(1)

(テキスト『心の琴線に触れるイエス』聖母文庫) 前回から続けて、イエスの十字架の死が贖罪と結びついていない、という井上神学の例として『すべてはアツバの御手に』p.148-9の続きを引用します。
^: イエス様の十字架の死というもののほど、おそれなく、人間の生涯の中で、あれほどの大きな苦悩と、あれだけ大きな屈辱感——ほんとうにみんなの前で裸にされて、吊るされるわけです。おそれなく、それくらいなら、死んだ方がいいとわれわれは考えるんじゃないかと思えます。そういう大きな屈辱ですね。それから、弟子たちからも見捨てられて、弟子たちがみんな逃げたしまう。女性の弟子たちも慰めに出てこない。そういう孤独です。人間の人生として考えられる最も深い孤独と屈辱と苦悩が、あの十字架の死に凝結しているわけです。

しかしまさに、そのイエス様の泥だらけになった、その十字架の死において、救いが、神様の救いの業が現存している。ご自分の業を現しておられるのです。: そういう意味で、信仰の目というものがたらしてくれるもの、それは人間の目から見るとマイナスでしかない、マイナスのイエス様の死というものが持っている意味、それは神様がそこにおいて働かれる、イエス様ご自身が言っておられるように、イエス様ご自身の人生は御父の御旨を果たすためのもの、御父がご自分の業を御子の生涯において果たされるわけであり、わたしたち一人ひとりの人生においても、神様がご自分の業をなさるといふことです。v(1994年「聖書講座」テープより)

南無アツバの集い&平田講座、於: 四谷ニコラバレ、日時5/28(土) 13時半、6/25(土) 同

「余白の風」入会案内

どなたでも参加できます。購読のみも可。*年六回奇数月発行*年会費千円(送料共)*採否主宰一任*締切日偶数月二十日*投稿先ブログ「南無アツバを生きる」の余白メールよりお問合せください。*〒振替口座〇〇一七〇一三二六〇九〇九 平田栄一